朴　炳道著

『近世日本の災害と宗教—呪術・終末・慰霊・象徴』

吉川弘文館、2021年3月刊、A5判、325頁、13,200円＋税

粟津　賢太*

1．はじめに

本書は2019年度に東京大学大学院へ提出された博士論文「近世日本における災害の宗教学的研究—呪術・終末・慰霊・象徴—」を下敷きに編集され出版されたものである。

本書の特徴としてまず評価するべきは、その視点の現代性である。また、「災害と宗教」は宗教学の主要なテーマの一つであることを正面から主張し、一般理論化を目指しているという点である。本書は極めて野心的かつ魅力的である。これらの点をまずは高く評価したい。

2．本書の構成と概要

本書は次のように構成されている。

序章　「災害と宗教」研究序説
第１章　「災害見聞記」からみる呪術と終末—寛文二年の近江・若狭地震と『かなめいし』
第２章　近世火災における死・埋葬・慰霊—明暦三年の大火と回向院の開創
第３章　近世飢饉における死・埋葬・慰霊—享保十七～十八年の大飢饉と飢饉死者
第４章　近世災害死者をめぐる認識と実践—「無縁」の近世的意味
第５章　近世疫病における災害の象徴化—文久二年の麻疹大流行と「はしか絵」の登場
第６章　幕末災害の象徴化と「災害錦絵」—「疱瘡絵」「鯰絵」「はしか絵」「コレラ絵」の相互比較を通して
終章　まとめと展望—「災害と宗教」研究の可能性

まず、序章において提示された理論的な先行研究史と概念の整理において、古代中国の災因論に遡り、英語圏やヨーロッパのディザスター論、漢字文化圏の中国、韓国、日本の用例から、「自然性と人為性」を洗い出していく。

「災害」の概念における「自然性」と「人為性」の錯綜、そしてこの概念が「歴史性」と「地域性」ももっていることが、それを定義することを困難にするのである。（本書20ページ）

そして、「災害」の４つの特徴として「事態性」「被害性」「社会性」「宗教性」を腑分けし、前近代の場合、「社会内部の脆弱性ではなく、事態性としてその性格に焦点化する」とし、災害とは人間的かつ社会的な現象であり、災害をめぐる認識・対処には宗教性が現れるという。

「非日常的な事態を前提とすることで、まるで「神秘体験」のような畏怖・脅威・無力感などの感情をもたらす一方、日常と区分される時間観と空間観、ひいては終末のような世界観の転換を招来する場合がある。また、その事態を理解し対処するために、超自然的な存在や力に依拠する場合も多い。そして事態がもたらす人的・物的被害から貧困・病気・死という人間における根本的で、限界的な問題を一瞬で発生させる点、ひいては共同体や社会の危機をもたらす点で、宗教的な認識と実践が現れる場合が多い。この災害の宗教性を明らかにすることは、本書の目指すところでもある。」（22ページ）

そして、これまで神話研究が対象としてきた世界各地に残り聖典化されてきた洪水神話、人類学におけるカーゴ・カルト、千年王国運動、

* 上智大学グリーフケア研究所客員研究員

災害ミレニアム、災害の世直し、災害ユートピア、トラウマとしての災害等の諸概念が整理される。

第１章から第４章までは、災害見聞記、明暦の大火、天明・享保の大飢饉、島原大変肥後迷惑、浅間山大噴火などの具体的な災害死者とその慰霊について論じている。その中で、中世の「無縁」概念が、「大量の無縁死者の発生」（158ページ）によって拡張・変質していったことを論じている。

一方、第５章、第６章では、はしか絵やコレラ絵、鯰絵や世直し絵などの災害錦絵を扱い、近代以前の民衆の象徴的思考・呪術的思考を明らかにしている。そのうえで、象徴変換が局限されたものか一般理論化できるのかという野心的な論点を提起しているが、紙枚の関係上、本稿で触れることはできない。

また、集合的な墳墓が、記念化され、記憶の場を形成していく拠点ともなることを本書では指摘している。

「一つの墓に多数の死者が埋葬されたことになり、その墓はある個人の墓ではなく、葬られた集団の共同の墓になる。一つの穴に葬られ、一つの墓を共有することにより、この死者の間には個別性がなくなり、一つの集団としての同質性が生まれる（中略）この死者の集団埋葬地は災害死者を代表する空間になるとともに災害の伝承と記憶の物理的な基盤になる」(180ページ)

評者は戦没者慰霊に関して集合的記憶研究の観点から論じてきたが、このことは確かに近代にも当て嵌まるであろう。だが、ここでは割愛する。

３．コメント

回向院の事例を扱った第３章および近世災害死者の全般的な意味を問う第４章、第５章は本書の白眉であろう。本稿ではここに焦点を絞りたい。

明暦の大火の犠牲者の慰霊のために「諸宗山回向院」が創建されたが、このことをもって回向院が「無宗派」あるいは「超宗派」的な寺院であり、「宗派を超えた慰霊の儀礼を行ったと解釈するには無理があろう」（100ページ）と指摘し、浄土宗の儀礼が行われていたことを論証している。そのうえで、回向院が実際には平等な慰霊の空間としての拡張性を獲得していったことを論じている。その論理が現れている個所をいくつか引用しよう。

「このように大きな変貌もみせてきた回向院は、その根本には「無縁の災害死者」のための埋葬と慰霊の空間というアイデンティティを維持しながら、他の異常死者や動物の慰霊の空間となり、また埋葬や慰霊とは直接関係がないと思われる開帳・巡礼・勧進相撲の空間ともなった。このような変貌の動機は、「無縁死者」のための空間という意味の拡張とともに、「無縁生者」にとっての回向の「現世利益」的な動機とも深く関連があると考えられる」（112ページ）

「近世寺檀制度の中で宗派ごとに、所属の檀那寺によって管理していた「死者と生者の関係」が、飢饉災害という非日常的な事態においてはまったく機能せず、仏教の形式よりは、民俗宗教の形式を借りて臨機応変な措置がとられたということである。国家や藩では、集団埋葬された大量の飢饉死者を慰霊するために、諸宗派の寺院に慰霊を命じたが、民俗の次元では、すでに存在していた宗派を問わない地蔵信仰の形で、寺檀制度での慰霊を代替したという」（152ページ）

「とくに明暦の大火の災害死者を集団埋葬した塚が「無縁塚」と呼ばれ、そこで開創された寺院の名称が「諸宗山無縁寺回向院」であったことから、集団埋葬された災害死者が「無縁」として認識されたことを指摘した。中世には見られなかった死者としての「無縁」が、江戸初期

に登場したのである」（172ページ）

こうした論理は、「三界万霊」「無縁」「有縁無縁」などの碑文にみられる用語の分析からも補強され、最終的には池上良正の指摘した「無遮」「無主死者」の論理へと収斂していく。さらに、この論点から、東アジアの宗教的な世界観にまで比較の視点も提示しようとしている。しかし、性急すぎるきらいがあることは否めない。理論的一般化を目指そうとする本書の野心的な試みは、同時に弱点にもなりうるだろう。一例をあげよう。

本書では飢饉死者に対する「藩からの慰霊」についても触れられているが、これは近代へまでも引き継がれている。例えば府県の戦争死者を祀る護国神社（招魂社）は各府県にひとつという国家システムではあったが、靖国―護国体制が整うのは昭和期にはいってからであり、同一県内に複数存在する場合がある。これは旧藩の秩序において創建されたものであり、近代（現代）においてまで併存している。国家システムに組み込まれず、かといって取り壊されもしない社殿は、おそらくもっとあるであろう。つまり一般化によって取りこぼされるものへの視点もまた重要である。

もうひとつ批判点をあげるとすれば、トラウマの用語法に関するものである。単なるレトリックやアナロジーを超えてこの用語を使う場合には、やはり理論的な根拠が必要であろう。

精神医学の研究史をたどれば、1942年にボストンのナイトクラブ「ココナッツグローブ」で発生した火災（Cocoanut Grove fire）では、生存者の治療にあたった精神科医Erich Lindemannがトラウマの用語を使っている（Lindemann 1944）。トラウマは、やはり災害の文脈で語られており、その意味で本書の論述を補強するものともなろう。また、個人の心理を超えて存在する、社会的あるいは文化的なトラウマの検討もすでに始まっている。近年ではJeffrey C. Alexander（Alexander et al. 2004）の他、とりわけEugen Koh（Koh 2016, 2021）が活発に論じている。

もっともこれらの批判点は本書の価値を貶めるものではない。むしろ今後のより大きな理論的一般化を期待して記している。

評者は、本書によって、個別に持っていた雑多な知識に、宗教学の観点から体系を与えられていく、目の覚めるような読書体験を得ることができた。

本書において著者が行っているのは、丹念に古典を読み直し、透徹した論理性のもと、それらを宗教学的な概念装置の中に総合していく試みであり、いわば武器としての宗教学の可能性を垣間見せてくれるものである。

参考文献

Alexander, Jeffrey C. et al. 2004, *Cultural Trauma and Collective Identity*, University of California Press.

Koh, Eugen 2021, The Healing of Historical Collective Trauma, *Genocide Studies and Prevention: An International Journal*, Vol. 15, pp. 115–133.

Koh, Eugen and Start W. Twemlow 2016 Towards a Psychoanalytic Concept of Community (I): Consideration of Current Concepts, *International Journal of Applied Psychoanalytic Studies* 13(1), pp. 53–64.

Lindemann, Erich 1944 Symptomatology and Management of Acute Grief, *American Journal of Psychiatry*, 101, pp.141–148.

宗教と社会　*Religion and Society* 2022.06, Vol.28: 93–97

書評へのリプライ

朴　炳道*

このたびは、本書を『宗教と社会』誌の書評欄に取り上げていただいた編集委員会に謝意を表したい。またお忙しいなか、本書を丁寧に読み解き、書評を執筆してくださった粟津賢太氏に心より感謝を申し上げる。

1．本書の目指すところ

本書はそのタイトルが『近世日本の災害と宗教』であり、副題が「呪術・終末・慰霊・象徴」である。筆者が意図したことではないが、出版社や書店では、宗教学や宗教史の本というより、日本近世史や日本災害史の本として分類されている。それもそのタイトルの最初に「近世日本」という日本史の時代区分が入っているから当たり前とも思われる。しかし、筆者としてはそのような時代区分を超えて現代宗教学の研究として読まれることを望んでいた。その点からいえば、タイトルより、現代宗教学が宗教現象として長くこだわり、その意味を問うてきた副題の四つのキーワードが本書の目指すところをよく表している。評者は筆者が望むその点をよく把握し、評価して「視点の現代性」として表現したと考えられる。

2．評者への返答

評者の具体的な評価やコメントは大きく二つの点にまとめることができると考えられる。まず、一点目は「一般理論化」を試みたことから生じる問題であろう。評者は本書の全体を通して試みた「災害と宗教の関係」への一般理論化を野心的であると評価している一方、性急すぎるところもあるとしているが、筆者自身もその評価に関してはありがたく思いつつ、適切な指摘であると認めざるを得ない。本書が投げている問いと答えは非常に簡単で、「災害が起きると宗教的現象がみられる」ということであり、とくに本書では呪術・終末・慰霊・象徴という現象を強調した。近世日本という時代の中の具体的な災害事例を取り上げて現代的に概念化された宗教現象を読もうとする際に、当然その事例と概念の間に隔たりが生じる。問題は一般理論がもつ普遍性といえるだろう。時代と地域を超えてそれが適用可能かという問いに対して、本書は近世災害のごく少ない事例から様々な概念を持ち出している点で、中世と近世のつながり、近世と近代のつながりという時代の流れや変化を十分把握して概念化・理論化したとは言えないところがある。例えば、評者が指摘した近世と近代の藩レベルの慰霊、国家レベルの慰霊の相違だけでなく、他の評者からも中世と近世の埋葬や慰霊の相違への十分な考慮が足りないという指摘があった（清水2021）。このような指摘に対しては、そのまま受け入れて今後の課題にするしかないと考えられる。本書では江戸時代260年間に起きた十余りの災害事例を取り上げているが、その中でも時代差や地域差などを十分考慮することまでは至らなかった。一般理論化という点で本書は、今後さらに適用可能な理論化を進めるための試論的な研究であり、一つの出発点を設けたと考えていただきたい。

二つ目のコメントは概念と用語使用の問題であると考えられる。本書では、評者が指摘した「トラウマ」以外にも、近世の災害を事例として取り上げる際に適切なのかと思われる多くの用語を筆者なりに概念化して用いている。まず、災害の文脈で「トラウマ」という概念が早い段階から語られてきたという評者の指摘は非常に重要である。また社会的・文化的文脈での「トラウマ」という概念の使い方も、災害研究で生かすことができると考えられる。本書の6章の一部では「鯰絵」というメディアを通して表れる江戸庶民の地震被害への悲しみや怒りという感情的な面を指摘したが、それを社会的トラウマとして本格的に議論してはいなかった。また直接に災害の被害を受けてはいないが、間接的に災害を「経験」した集団や社会の観点か

* 慶尚国立大学校（韓国）日本語教育学科助教授

ら、災害をめぐる文化的トラウマも論じることができると考えられる。3.11東日本大震災のトラウマは被害地域や社会だけでなく、日本全域や世界中にも「文化的トラウマ」を形成させたという点は、我々が10年間見てきた現実でもある。そのほか、「ユートピア」や「無縁」概念の拡張、「災害錦絵」という筆者の造語、宗教現象を表す用語として取り上げた呪術・終末・慰霊・象徴という概念も歴史的な文脈など様々な観点からその適切さが問われることを予想していた。その点に関しては本書の中である程度その経緯を説明しているが、本書で目指している一般理論化の試みやそのための概念の拡張という戦略として、今後一つ一つの概念や用語の歴史的コンテキストや用例の分析を補う必要があると切実に感じている。

このような評者への返答は、返答というより筆者自身の反省点、そして今後の課題や覚悟を述べたことにすぎないかもしれない。評者が本書を評価して最後に用いている「武器としての宗教学の可能性」という表現を再び借りて言うならば、その可能性というものは、比較宗教学の観点から多様な時代や地域の事例をとりあげ、そこから様々な概念を操り、説明して理論化し、それをまた他の事例に当てて修正していく、という終わりのない過程の中にあると筆者は強く信じている。その宗教学の力が本書の中から少しでも見えてきたとしたら宗教学者として歩き始めた筆者には、これ以上励ましになる話はないだろう。

参考文献

清水邦彦 2021「書評と紹介　朴炳道著『近世日本の災害と宗教』」『宗教研究』95(3)：107-112。